

言葉は偉大である

作詞家・作家

阿久^あ久^く悠^{ゆう}

言葉が稀薄になったと誰もが言う。言い始めてから、もうずいぶんになる。言葉の稀薄さを社会や人間の危機として捉えていながら、一向に誰も改善のために努めず、稀薄なことが傾向として定着した。これは由々しき問題なのである。

ぼくは、文章を書くことが天職だと思っているので、言葉の価値の下落が何よりも無念だし、あってはならないことだと思っている。大仰に言う、日本が壊れる。

言葉は最少必要限、使い勝手がいい程度にあればいいのではなく、一つの言葉が大きな想像世界の扉を開く鍵になってほしいと思っている。言葉は言葉であって、さらに言葉の枠では納まらない万能の力を有するものなのがある。

かつて、言葉は豊かだった。心という未知

のものにも触れられたし、宇宙を駆け回ることでも可能であった。言葉が豊かということは、伝えたい気持ちが強く、わからせたい誠意に満ち、懸命に想いを魅力的に磨きながら、唇にのせることである。そして、心をトントんと叩いた。

トントんと叩くと、トントんと響く。それが最低の条件で、実はトントんと叩いた人は、キンキンと響いたり、ビンビンと弾んだりして貰いたい、思っているものである。

それが人と人との会話で、叩き合い響き合いが連続している間に、何とも豊かな想像世界、あるいは創造世界が構築され、人々は自分の発した言葉の力に感動したのである。

それがいつの頃からであろうか、会話が連鎖状態にならなくなったのである。人々は言葉を、その時点で必要な伝達記号としか思わ

なくなったから、自分の都合は伝えるが、その都合に対して相手が、好感を抱いたか、当惑を覚えたかさえ考えなくなったのである。

これは会話とは言わない。二人の人間が交互に発信しているだけで、受信後の反応を何ら期待していない。ましてや、かつてのように、会話とは二人以上の人間が誠意で創造してゆく、芸術の一種であるなどとはとても思えないのである。

こんな光景をよく見かける。二人で話している。AがBにまず話す。本来ならその時、BはAの言葉を理解しようと目を見つめ、AはBの反応を見落とすまいと、表情の動きの一つまで探るものである。

ところが、昨今では、Aの話しかけにBが反応するのではなく、Aの話の途中でBは既

に、自分の都合を頭の中で考えている。つまり、相手の話は聞いていない。単にテニスのサーブのように、話す権利を与えただけなのである。

何でもないありふれた光景だが、ありふれているだけに不気味で恐く、今の日本の社会のすべてが、交互の発言を無感動に行うだけの、一見会話風の言葉の無駄打ちで成立しているものだと言えるのである。

言葉は自分のためにだけあって、相手の心や存在を気遣うものでなくなった。一体、いつ、誰が、何のために、このような自分語の妄信を定着させてしまったのだろうか。こういう状態だから、悲しいかな、言葉はどんどん痩せていってしまっている。もう言葉は、飛ぶことも走ることも出来なくなり、息えただえなのだ。

日常に言葉がなくなると、日常に慣らされて小説や歌からも言葉がなくなる。特に歌に顕著である。ぼくは作詞家で作家であるから、特にそのことをヒリヒリと感じる。

ましてや歌の黄金時代といわれた七〇年代、八〇年代に、膨大な数の歌を奔放に発信し、その躍動を見つめつづけてきたから、痩せて時代を泳げなくなった言葉や歌が悲しいのである。

言葉は便法でもなく、ましてや記号でもなく、一つの言葉で世界を想像させる催眠のキイであり、その言葉で社会に色を着けたり、風を吹かしたりする、超現実の妖怪の役目さえ背負っているのである。たかが言葉、しょせん歌で片づく小者ではないのである。

今の歌に言葉がないわけではない。ある。あり過ぎて、饒舌でさえある。それなのに、豊かでも、パワフルでもないのは、言葉がすべて自分の都合であり、他人のため、他人を動かそうとする誠意や謙虚さと無縁だからである。自分、自分、自分、何から何まで自分のため、自分のシンパにだけは、彼らの言葉は隠語のように気持ちよく伝わる。ただ、日本という社会が細分化されたシンパへの隠語で成立しては困るのである。もう半分以上がそうになっている。

言葉をたくさん持っている、自分の想いが正確に伝えられる。言葉をたくさん知っていると、相手の気持ちをやさしく理解出来る。これは数年前、「課外授業 ようこそ先輩」というテレビ番組で、小学六年生に贈ったメッセージの一部である。



阿久 悠（あく ゆう）
1937年 兵庫県淡路島生まれ。
尾崎紀世彦「また逢う日まで」、ピンクレディー「UFO」など、これまでに作詞を手がけた曲は5000曲以上におよぶヒットメーカー。映画化された「瀬戸内少年野球団」など、多数の著作がある。
1999年紫綬褒章を受章。